

幻の画家

片岡源次郎



本名 片岡源次郎
誕生日 1867年4月19日
慶応3年3月15日
出生地 佐賀県有田町
死没年 1924年5月8日

資料作成

🌸 有田史談会

アメリカの近代美術界にジャポニズムの種を蒔いたと評価されている日本人画家ゲンジロウこと片岡源次郎。日本国内では全くと言っていいほど知られていない“幻の画家ゲンジロウ”の素顔とは？

第9回FNSドキュメンタリー大賞ノミネート作品

『ゲンジロウへの旅』（制作 サガテレビ）

焼物の里・有田町は佐賀県西部、伊万里湾に注ぐ有田川上流の狭い山間に位置する。言わずと知れた「日本の磁器の発祥の地」だ。黄金時代を迎えた17世紀後半から18世紀にかけて、有田焼は伊万里の港から全国各地にのみならず、長崎の出島を介して東南アジアや、遠くヨーロッパにまで広まった。言ってみれば、有田はその頃から“日本文化の窓口”でもあったわけだ。

明治になって有田焼も九州初の法人企業・香蘭社を中心に製造、出荷・販売の近代化が進められた。その近代化の過程で、有田から海外に派遣された焼き物の関係者も少なくなかったようだ。

第9回FNSドキュメンタリー大賞ノミネート作品のトップを切って放送される『ゲンジロウへの旅』（制作 サガテレビ）は、明治の中頃に家業の有田焼の販売のため渡米したものの、途中で絵画の道を志し、画家としてアメリカの美術界にジャポニズムの種を蒔いたとアメリカでは評価されているが、日本国内では全くと言っていいほど知られていないゲンジロウ（片岡源次郎）の足跡を追った作品だ。

全ての始まりは、去年2月アメリカからサガテレビに届いた一通のEメールからだ。メールの差出人はコネチカット州グリニッチ在住の上住升（うえずみ・のぼる）さん。その内容は、佐賀県有田町出身の画家ゲンジロウについて分かっていることを教えてほしい、というものだった。実は上住さんは平成3年に関西テレビを定年退職し、その後、娘さんの嫁ぎ先のアメリカに住まいを移した人だった。

「グリニッチはニューヨークから車で1時間くらいのところで治安も良く、昔から多くの日本人、日系人が住んでいます。ですから博物館や美術館にも、日本に関するものが多く展示されています。上住さんはこの町で博物館の展示物の説明を和訳するボランティアをしているのですが、その活動中に『ブッシュ・ホーリー・ハウス』という博物館で、ゲンジロウの作品に出会ったそうです」

取材に当たったサガテレビの内田信子ディレクターが説明してくれた。

「ところが上住さんは、ゲンジロウという画家のことは全く聞いたことがなく、周囲の日本人に聞いても誰も知らない。ただ佐賀県の有田出身ということは分かったので、サガテレビなら何か分かるかも知れない、とメールで問い合わせてきたのです。ところがゲンジロウのことを知る者は社内にもいませんでした。それならば、とチームを作って取材を始めたのです」（内田D）

本格的に調べ始めたものの取材は難航した。佐賀市内では何の手がかりも得られず、有田町でいろいろ調べた結果、ようやく孫にあたる田中祐喜子（たなか・ゆきこ）さんを探しあてた。そして、取材班は初めて確認されたゲンジロウ作の油彩画を含むおよそ10点の作品とゲンジロウの肖像写真を目にすること

になる。

ゲンジロウの本名は片岡源次郎、慶応3年（1867年）に有田町で生まれた。江副家に養子に入り明治24年（1891年）に24歳で家業である有田焼の販売のために渡米したものの、途中で画家を志し、ニューヨークの歴史ある美術専門学校アート・スチューデント・リーグに在籍した。そして明治44年（1911年）に最終的に帰国するまでアメリカでエトール・ゲンジロウ（江副源次郎）またはカタオカ・ゲンジロウの名で、画家、小説の挿絵画家、ステージデザイナーとして活躍した。画家の道を志した時点で江副家との養子縁組を解消し、明治44年に帰国した後は東京に在住、通信博物館（現在の通信総合博物館）に勤務し、大正13年（1924年）57歳で結核で亡くなった。もちろん国内でも絵を描き続け太平洋画会（現在の太平洋美術会）に所属した。展覧会に出品もしているが、画壇の主流ではなかったためか、アメリカでの成功ほどには評価されていない。むしろ、画家・片岡源次郎の存在は国内ではほとんど知られていない、と言った方がよさそうだ。田中さんは、小山家の養子になった源次郎の三女・文（ふみ）の長女になる。

——以上が取材班が突き止めたゲンジロウの大まかな経歴だ。

取材班は祐喜子さんの協力を得て、アメリカで一緒にゲンジロウの足跡を追うことになった。そして彼が印象派の画家を目指して仲間たちと青春時代を過ごしたコネチカット州グリニッチやニューヨーク、フィラデルフィアを訪れた。ゲンジロウはこれらの地を拠点にアメリカ印象派の第一人者、ジョン・トワークトマンに師事し、アメリカの印象派の画家たちと交流を深めていった。こうした交流は、やがてアメリカ側の画家たちがジャポニズムの影響が色濃くみられる作品を生み出すという形で一つの結実を見ることになる。

ゲンジロウ自身は、その日本画風の風景画、そして特に花の絵が注目され、アメリカで頻繁に個展も開催したという。さらにはオペラのマダムバタフライの舞台デザイナーを務めたことや、ラフカディオ・ハーンなどの複数の本の挿絵を描いたことが確認されている。つまり、ゲンジロウはアメリカの近代美術史に確固とした足跡を残していたのだ！

明治期、岡田三郎助や百武兼行など佐賀県出身者を含め、ごく限られた画家がパリなどヨーロッパで絵画を学び、日本の洋画界の礎を作ったことはよく知られている。しかしこの時期にアメリカで活躍した日本人画家がいたことについて、日米美術交流史に詳しい帝京大学の岡部昌幸助教授は、

「ゲンジロウが非常に早い時期にアメリカに渡り、アメリカで生活した期間が長い点。商業美術にも手を染めている点。日本の技術や伝統をアメリカの芸術に融合させた点など、いずれにおいても興味深い。エイキンズやトワークトマンというアメリカの重要な画家たちと直接関係があり痕跡も残しているという画家はほかにはない。ゲンジロウの美術交渉史の中における位置は大変意義がある」と述べている。

さらに注目すべきことが分かった！

「ゲンジロウの作品は田中さん所蔵の作品以外では、アメリカ側で自筆の水彩画数点、あとは本に載せられた挿絵のみしか確認されていません。ところがゲンジロウとアメリカが生んだ最も偉大な画家と言われるトマス・エイキンズとの間に親密な交流があり、エイキンズがゲンジロウを描いた肖像画が存在する

ことが判明したのです」（内田D）

きっかけはゲンジロウがエイキンズに送った手紙だった。その中に「描いていただいた肖像画に先生のサインがないのが残念です…」という記述があったのだ。その絵は今、一体どこにあるのだろうか？もし見つければ、美術史上、画期的な発見になる。

取材班はゲンジロウが帰国に際して持ち帰ったと考えられるこの絵の行方を追い始めた。その第一歩は、消息不明となっているゲンジロウの息子を探すことだ。帰国したゲンジロウは東京で生活し、家庭を持って子供も生まれた。その後は有田とは疎遠になっていったらしいが、田中さんは、幼い頃に有田で一回だけゲンジロウの長男に会った記憶があると言う。しかし、それとて50年以上前のことで、今も健在なのか、どこに住んでいるのか全く分からない。取材班は判明している長男の最後の住所・港区白金を訪ねたが、そこはマンションで、取り壊され新しく立て替えられていた。近所でいろいろ聞き回り、さらに区役所にも問い合わせるなど、あらゆる方面に手を尽くしたものの情報は得られず、半ば諦めかけていた。そんなところに一通の手紙が届いた。それは何と、探していた当の長男からだった。以前の住まいの周辺で聞き回った取材班のことを人づてに知り、手紙をくれたのだ。ゲンジロウと9歳の時に死別し、他家の養子となった長男・栄一郎氏は84歳、台東区内で健在だった！

祐喜子さんとともに東京に急ぐ取材陣。長男の口から語られるゲンジロウの実像とは？そして“幻の肖像画”の行方は…？

内田信子ディレクターは取材を終えた感想をこう語る。

「報道の仕事に携わっておよそ20年。佐賀のことは大体知っているつもりだったんですが、ゲンジロウの名はさすがに聞いたことがありませんでした。県内にはまだまだ私が知らない事実が眠っている。『彼のことが知りたい』という素朴な好奇心から始めた取材でした。

ゲンジロウに関する資料がほとんどなく、また彼を知る人が日本にほとんどいないという中で取材は困難を極めました。『これは番組として成立しないかもしれない』と何度もあきらめようとしてしまいましたが、そのたびに偶然、交渉していた取材の許可がおりたり、ゲンジロウに関する新事実が分かったり…。まるで何かに導かれているような感じがありました。今では多くの日本人が海外で活躍していますが、約100年も前にこんな日本人がいたんだということを見て欲しいです」

明治時代。キャンバスに触れることができた日本人が極めて限られ、またその研修の場がパリを中心とするヨーロッパだった頃。そんな明治24年から44年迄という日本人として最も早い時期に、しかも長期にわたって渡米し、アメリカの芸術界にジャポニズムの種を蒔いたされるゲンジロウ。国外で認められた初の日本人の挿絵画家でありステージデザイナーとなったゲンジロウがアメリカの芸術界ではたした役割とは？

そしてトマス・エイキンズが描いたゲンジロウの肖像画は果たして見つかるのか？

番組は埋もれた記録を丹念に掘り起こし、一人の青年の姿を通じて日米の文化交流の黎明期を浮かび上がらせる。



ウィキペディアフリー百科事典

江藤源次郎

江藤 源次郎（えとう げんじろう、1867年4月19日（慶応3年3月15日） - 1924年（大正13年）5月8日）は、日本の画家。佐賀県有田町出身。

有田焼の絵師となり、19世紀末にアメリカニューヨークに渡る。西洋油彩、印象派の洋画を学びエトール・ゲンジロウまたはカタオカ・ゲンジロウの名で、画家、小説の挿絵画家、ステージデザイナーとして活躍した。特に、アメリカではコネチカット州コスコブのアメリカ印象派画家達にジャポニスムを普及した点が評価されている。同地に日本文化の紹介などもしている。

コスコブ芸術コロニーに集まった画家たちに繊細な日本画の技法を教えてジャポニスムを起こし、ジョン・ヘンリー・トワックトマン（John Henry Twachtman）、チャイルド・ハッサム、トマス・エイキンズなどの巨匠といわれた画家たちと直に交流するなど、画壇における日米交流の先駆的役割を果たした最初の日本人であったといえる。

生い立ち

江藤源次郎（本名：片岡源次郎）は、慶応3年（1867年）に肥前国有田（佐賀県有田町）で生まれた。片岡家の家業は有田焼（伊万里焼）の絵師で、その後江副家に養子入りし、絵師として経験を積んだ。苗字として「江藤」を使うようになったが、なぜ「江副」でないのかは不明である。

明治24年（1891年）に24歳で家業である有田焼の販売のために単身ニューヨークマンハッタンをめざし渡米した。江副家は日本美術工芸品販売専門の起立工商会社の社長で佐賀出身の松尾儀助とは知り合いで、その関係で源次郎に起立工商会社のニューヨーク支店を紹介したと推察する人もいる [1]

源次郎は1893年に開催されたシカゴ万国博覧会の日本館での有田焼などの出展を手伝うことになった。同博覧会のアティウッド美術 (Attywood's Fine Arts) 館では当時のアメリカ油彩の代表的画家であるジェームズ・ホイッスラー (James A. Whistler)、チャイルド・ハッサム (Childe Hassam)、ウィリアム・メリット・チェイス (William Merritt Chase)、ジョン・シンガー・サージェント (John Singer Sargent)、トマス・エイキンズ (Thomas Eikins) などの展示もあり、源次郎の目に触れたとも推察されている [2]。

1894年6月、理由は不明だが源次郎は江副家との養子縁組を解消、苗字を「片岡」に戻した。但し、ペンネームとしてはそのまま「Genjiro Yeto（江藤源次郎）」の名前を継続している。

江藤はやがて当初の有田焼販売には関心を失い、画家を志して、28歳の1895年2月美術専門学校アート・ステューデントズ・リーグ・オブ・ニューヨークに入学。

特にアメリカ印象派画家として指導の立場であったロバート・ブラム (Robert Blum) , ジョン・ヘンリー・トワックトマン (John Twachtman) に師事し、油絵、印象派の画法を学んだ。生徒であったエルマー・マックレー (Elmer McRae) とも既知になった。彼が履修した 1894~95 年のコースの記録があり、それによると登録名はガンニジェロ・イエトー、科目の一部を挙げると午前の部のウィリアム・メリット・チェース講師の油彩実技 (M.P.) 、アービング・ワイルス講師のスケッチ (W.S.) などであった。源次郎は新たにアトリエを 5 番街 14 番通り近くのビルの一室に構えた。

1896 年より、ジョン・トワックトマン師の誘いで、コネチカット州コスコブの賄い付き宿舎ホーリーハウス (現グリニッチ歴史協会所有の博物館) における同美術専門学校のサマークラスに参加し、1901 年までホーリーハウスに滞在した。当時、マンハッタンからコスコブまでは既に鉄道が開通され、足の便があった。またコスコブは当時まだ植民地時代の古風な家が立ち並び、広いミアナス河の河口に位置し、風光明媚なロンガイランド・サウンドに面していて、豊富な画題となる景色を提供する場所であった。このコスコブのホーリーハウスにおける画家の集まりが後「コスコブ芸術コロニー」 (Cos Cob Art Colony) と呼ばれるようになり、アメリカ最初の印象派の発祥の地となった。西洋画・油彩を勉強する中で、同クラスのアメ리카の若い画家達に日本画の画法・特徴なども教えている。当時既に名声を博しているジョン・トワックトマン、チャイルド・ハッサムらも触発され、日本の画法を取り入れた絵が何点か残っている。

1897 年には友人となったエルマー・マックレーとともに同校でコスコブ展覧会開催を手伝っている。また精力的に水彩画を描き、ニューヨーク水彩画クラブ (New York Water Color Club) 、ナショナル・アカデミー・オブ・デザイン (The National Academy Design) 、フィラデルフィアのペンシルベニア美術アカデミー (The Pennsylvania Academy of the Fine Arts) , フィラデルフィア・美術・クラブ (The Art Club of Philadelphia) などに出展している。

アメリカでの生活

画業のかたわら、この時期コスコブの地では宿主ジョゼフィン・ホーリー夫人の計らいで婦人らに着物を着せテラスで茶会を催し、地元の人々に日本文化を紹介している。また、近所のリバーサイド町に住む生糸貿易で財をなした新井領一郎の夫人田鶴もホーリー家で活け花を紹介している。

画家として生計を立てるのは楽でなく、絵画も高い値で売れないため、彼は日本関連の小説の挿絵画家としても活動した。その中には野口米次郎著 (イサム・ノグチの父) の「The American Diary of a Japanese Girl」の挿絵、ラフカディオ・ハーン (小泉八雲) 著「骨董」の挿絵など多数ある。

1900 年にはステージ・デザイナーの仕事も手がけ、「マダム・バタフライ (蝶々夫人)」劇 (ヘラルド・スクエア・シアター、Herald Square Theater) の文化アドバイザーに任命され、ステージの絵を描いたとされるが、一説によれば使用道具などの細かい指導のみをしたとも言われている。

1901 年 5 月、最初の個展をニューヨークのキャリア・ギャラリー（Currier Gallery）にて開催、水彩画 150 枚、本の表紙や挿絵 40 枚などを展示した。

1904 年には一時帰国し 8 月に川内エンと結婚。この間多くの水彩画を描き、翌年単身渡米した際に多数携帯した。日本画と印象派の西洋画の融合は当初アメリカ画壇で好評を受けたが、そのユニークな画法を続けていく限界を知って水彩中心の日本画を描くようになった。翌々年に長女米（よね）誕生。

1906 年には精力的にニューヨーク、ボストン、バッファロー、デトロイト各地で展覧会を開催、同年ニューヨーク市のサルマガンディ・クラブ（Salmagundi Club）水彩画展でモルガン（Morgan）賞を受賞。同年、肖像画の巨匠トマス・エイキンズ（Thomas Eakins）の手助けによりフィラデルフィアに展覧会を数回開催している。この時期エイキンズに肖像画を描いてもらったが、急な帰国で彼のサイン無しで日本に持ち帰った。その旨を書いた彼への礼状が現存しているが、当の肖像画は行方不明となっている。

1909 年、エイキンズ紹介のブルックリン美術館芸術員であるステュアート・キューリン（Stewart Culin）を日本で迎え、日本美術品買い付けの手伝いの傍ら、家族で鎌倉、仙台などを案内する。この時期に苗字を「片岡」に戻している。同年再び渡米、12 月にニューヨークのマディソン（Madison）画廊で水彩画展覧会を開催。

帰国から死去

1911 年、44 歳を最後に帰国し、東京の千石（現、東京市小石川）に住居を構え、逋信博物館（現在の逋信総合博物館）に勤務。国内でも絵を描き続け、太平洋画会（現在の太平洋美術会）に所属した。展覧会に出品もしているが、画壇の主流ではなかったためかアメリカでの成功ほどには評価されていない。

1912 年、ステュアート・キューリンが再来日した際には美術品収集を手伝い、一緒に歌舞伎、能（画家の野口米次郎と同伴）などを観賞、夜は家族（妻と子供二人）を伴い食事をしている。

1924 年、結核で死去。享年 57。グリニッチ歴史協会には今でも彼の写真とマックレーが描いた源次郎の肖像画が保存されている。

作品リスト

絵画（油彩）

〔妻と娘〕（作品名不明） 縦 31.2x 横 21.5 （個人所蔵）

絵画（水彩画）

〔娘と花〕（作品名不明） 縦 35.2cmx 横 27.6cm （個人所蔵）

〔茶のもてなし〕 1905 年作 縦 25.4cmx 横 38.6cm （個人所蔵）

〔習字を習う少女〕 1914 年作 縦 34.3cmx 横 24.1cm （グリニッチ歴史協会所蔵）

〔朝顔〕 1915 年作 約縦 22.9cmx 横 30.5cm （個人所蔵）

〔京都嵐山の桂川にかかる橋〕 1909 年作 縦 30.8cmx 横 43.5cm

絵画（エッチング）

自画像

挿絵（表紙を含む挿絵が掲載された本の題名・著者を掲載する）

「My Japanese Wife :A Japanese Idyl」 1902 年 クライブ・ホーランド Clive Holland

「Tama」 1910 年 オノト・ワタンナ著 Onoto Watanna

「A Japanese Nightingale」 1902 年 オノト・ワタンナ著 Onoto Watanna

「The American Diary of A Japanese Girl」 1902 年 ミス・モーニング・グローリ 著 (野口米次郎のペンネーム)

「A Japanese Garland」 1903 年 フローレンス・ペルティエ 著 Florence Peltier

「Tora's Happy Day」 フローレンス・ペルティエ・ペリー 著 Florence Peltier Perry

「骨董」 1902 年 小泉八雲 (ラフカディオ・ハーン) 著

「Little Sister Snow」 1909 年 フランシス・リトル 著 Frances Little



エルマー・マックレーが描いた源 次郎の肖像画